時事新報

養蚕論

日本富國の策は唯殖産を奬勵するに在るのみとは人の能く言ふ所なれども今單に殖産とのみ云ふて其殖産の種類を撰ばざるは策の得たるものに非ず凡そ今の文明世界に在りては大に商賣貿易の事を談せんとすれば狹き一國内と目當てとは茫々たる商賣世界を控へて廣き世界萬國を相手にすると肝要あるが故に富國の根本たる殖産を奬勵せんとして其種類を撰ぶにも亦先づ此邊に注意して國の殖産と世界各國の貿易とを恰かも密接の關係を保たゝむるの覺悟なかる可らざるあり殊に我國封建の時代には制據絶城動もすれば糧を以て第一の依賴品と爲したる由來よりして當時の人氣頻りに米作を重んぜて川の演、山の隅、高燥の處は溜池を作り濕地には乾水の法を立て種々樣々に工風して日本全國ありとあらゆる耕作地は手段の屆く限り之を稻田に變ぜて米作を奬勵せしかば米を作ると云ふは其收穫の利を外にして別に何か桑麻らし兒思ひを爲し苟も農家の名あれば米を作らざる者なく米作と農業と孚と異にして意味を同ふし米と作らざる者は農とあらざると云ふが如き風潮に在て今日に至るまでも米は日本國産中に首位を占ひるとは爲れり畢竟封建の遺風にして斯くまで米作を珍重したるとなれども元來米その物は日本支那朝鮮等米食國人の需用に供するのみにして歐米諸國人の常食にあらざれば其需用も亦甚だ少なく時に東洋の米を買入るゝは之を以て製造所用の糊と製する位に過ぎずと云へり左れば東洋米の豊凶は唯東洋の米市場に影響するのみにして紅海以西の市況に感せざるのゝならず或は此東洋諸國れ中にても其市場は區々互に相分立して日本の米價と香港西貢邊の米價とは其間に抑揚の脈絡なくして云はゞ米の商賣區域は唯東洋の國々各自に限るものなりと申して可ならん斯かる事の次第あれば歐米諸國にて米を需用するの額は減に少小なるものにして東洋諸國にたまゝ〳〵餘剰を生じて倫敦其他の市場へ輸出するとあれば忽ち供給の度を超へて價の下落を來たすのみならず元來米の品柄は嵩張りて運賃を要もると少なからざるが故に遠路みれを海外に輸出しては毎度得失相償はざるを常とす即ち米は狹き東洋一國内れ商品にして世界の貿易に適せず外國商賣の今れ世の中に在りてはかた〳〵以て富國の産物と爲を可ふざると明白なるべし今より日本國れ爲めに謀るに永久米作の奮法のみを守り米を以て第一等の國産物と爲し置くは我輩の贊成する能はざる所にして今日の急務を云へば在來の畑地は無論稻田をも變ずして漸く桑田に變ずるの一策あるのみなりと信ずるなり

抑も養蚕の業は日本の風土氣候に適して繭の性質、絲の品位敢て他に讓らざるは今日世界の公評にして或は世界の蚕業國と見做すも可からん國土の蚕業に適すると此の如くにして其蚕業と外國貿易との關係は果して如何と等ねるに蚕絲の販路の廣きと彼の米なるその比に非ず歐米諸國の市場に在りても蚕絲は常に第一等の貿易品たるが故に我國にて今後大に蚕絲業を奬勵するは富國の道に於て最も慥よして最も見込あるものと云ふべし或人の說に絹絲は人身の感觸に快からざるものにして絹布を慣れたる日本人にても直に之と肌にするを嫌ふ者あり此一點に於ては木綿に及ばざるみと違し又その外見の如何に就ては近來歐米諸國にて毛織の品物次第に精巧美麗を致して人の目を悅ばしむるもの少なからず左れば今日の處ては好奇の人情一時絹布を珍重するが如くなるも各地れ蚕絲業漸く發達して品物の供給を增加するに至らば之を珍重するの情も次第に衰へて復た今日の顏色なかる可しと云ふ者あれども此說は未だ以て絹絲の榮譽を損害するに足らず絹は人の肌の感觸に適せずと云ふも是れは唯直接一枚丈けの話しにして人の衣服は必ずしも肌に接する部分のみあらず否な其接する所は僅に小部分のみ又毛織物が次第に精巧に進みたりと云ふも絹布の製造法も亦同時に進歩を可ければ精巧は毛織の專有にあらず故に我輩が絹の爲めに辨護する所は唯れを羊毛に比して其質如何れ一點に在るのみ絹の質の輕騷よして光澤色彩の美麗なるは所謂織物の大王にして毛布綿布の如兒が如何に新工風を凝らすも遂に北面の輩たるを免れず絹布の運命萬々歲今後何ほどに其供給を增じたりとて唯棄せらるゝの恐る兒は世界の人情は訴へて其裁判に依賴を可きものあり且世界中に於て風土氣候能く桑蚕蠶に適して人民も亦能く業に慣れたる地方は其部分甚だ少なかる可ければ今より我國にて何程に蚕絲業を奬張して假令へ全國悉く桑田に變ずるとあるも世界各國の需用を相手にして品物の賣口に窮するが如きとあるべ兒は我輩の萬々保證する所あり即ち我輩の所見は於て今日れ策は世界の商賣に關係あ兒彼の米の耕作などに戀々せずして一向に蚕絲業を奬勵し以て富國の道と開くの一事あるのみと信ずる以所なり

官報

○大藏省告示第六十號

一金五百萬圓

右償還ノ爲メ本月中抽籤執行ス

明治二十年五月十一日　大藏大臣伯爵松方正義

○軍艦發着　海門艦は去る八日横須賀より品海に回航せり○横濱港碇泊の露國軍艦ヴイツチー號は去る九日午前四時二十五分浦潮斯德に向ひ拔錨せり

○獨逸海外移住民　千八百八十六年間に獨逸國の講港及恩惜畢港を經て海外に移住したる者は七万六千六百八十七人にして千八百八十六年に於ては十万三千六百四十二人、同八十四年に於ては十六万六千百十九人、同八十三年に於ては二十一万五百四十七人なり即ち昨年に至るまで海外移住民の數は年々大に減少せしも單に昨年十二月一箇月の數を摠ぐれば二千七百五十四人にして千八百八十五年及同八十四年よりも遙に數多ありしを見れば本年一月に於ても亦海外移住民の數は增加して是より更に益々其增加を見るに至るも測られず

○北米合衆國郵便印章附封筒の新製　三月三十一日華盛頓通信書は一仙、二仙、四仙及五仙の郵便印紙附封筒の新製に付き數多の意匠を拔出せしが今般愈々其一仙の印章にはフランクリン二仙にはワシントン、四仙にはジャクソン、五仙にはグラントの顔を附することに決し五月一日の頃を以て初めて之を發行する筈なりといふ

○海外旅券與數　去る四月中外務省に於て交付せし海外旅券の數は米國行男十七人、英國行男三人、佛國行男三人、女二人、清國行男八人、朝鮮國行男三人、女一人、其他歐米各國行男八人合計四十八人あり

○清廷彙報（昨日の續き）

○親政典禮の概況　去る二月七日は清穆光緒十三年正月十五日にして即ち清帝親政の典禮を擧行せられし當日ありしが清國に於ては歐洲諸國と異なり斯る時にも各國使臣を召見せらるゝ事のなかれば其擧行せられし典禮の模樣も知る可き由なけれども聞く所に據れば此日清帝は早朝より大高殿並に壽皇殿に於て天地神祇の儀式を擧られ午前第八時皇太后の御所なる慈寧宮に至り三跪九叩首の禮を行ひ第十時に大和殿（每歲元旦冬至天長節及祭中の大慶典ある時出御ありて賀を受けらる）に至り大公大臣六部九卿其他諸官員の賀を受けられ第十二時保和殿に於て筵宴せられ當日恩詔を賜はりしと云ふ（恩詔は藏せて去月十九日の官報本欄に在り）此恩詔は禮部より印刷して二京十八省に頒行し現に北京市中の諸所に掲示せり

○獨逸國兵制　去る四月中陸軍省に於て獨逸國の講港及恩惜畢港人を略賣して海外に出稼をゆさしむる者も之を内地に比すれば露顯し難く且賣りて海外に到る間は之を内地に比すれば容易なる故人を略賣して海外に出稼をゆさしむる者日一日より多きを以て兩廣總督張之洞は嚴後兩廣に於て此罪犯を處するに貸從を分たず一律に斬決し先づ法を正したしと上申し右は大皇帝の御覽に入りたるへしと聞く史恩溥の處刑　戸部銀庫の書吏にして史恩溥と云ふ者先般山東省より河工の經費一百万兩の下附金請取方中出の節其間に立て私にせし所ありとの風聞ありしは監察、御史王慶榮、劉輪墓等より彈劾の奏疏を上るあらず否な其接する所は僅に免職せられたるに過ぎず次第に精巧に進みたりと云ふも絹布の製造法も亦同時に進歩を可ければ精巧は毛織の專有にあらず故に我輩が絹の爲めに辨護する所は唯れを羊毛に比して其質如何れ一點に在るのみ絹の質の輕騷よして光澤色彩の美麗なるは所謂織物の大王にして毛布綿布の如兒が如何に新工風を凝らすも遂に北面の輩たるを免れず絹布の運命萬々歲今後何ほどに其供給を增じたりとて唯棄せらるゝの恐る兒は世界の人情は訴へて其裁判に依賴を可きものあり且世界中に於て風土氣候能く桑蚕蠶に適して人民も亦能く業に慣れたる地方は其部分甚だ少なかる可ければ今より我國にて何程に蚕絲業を奬張して假令へ全國悉く桑田に變ずるとあるも世界各國の需用を相手にして品物の賣口に窮するが如きとあるべ兒は我輩の萬々保證する所あり即ち我輩の所見は於て今日れ策は世界の商賣に關係あ兒彼の米の耕作などに戀々せずして一向に蚕絲業を奬勵し以て富國の道と開くの一事あるのみと信ずる以所なり

報

○朝鮮使節　朝鮮より清國に進貢の使節は去る一月二十一日を以て北京に到著し正陽門内會同四譯館（天清寺興に諸國貢使の至る者を待ち館官を置き以て書翰を通じ以て華夷の書を製はしむる所を會同四譯館と曰ふと）に寓居し翌日より朝鮮の使節清京に此に居り兩國貢物及賀表幕を呈進し三月十日には清帝より緞匹其外賜賞等の恩賞あり翌十一日には禮部の大堂に於て饗宴を賜はりし等のとあり而して該使節は去る十五日當地發足歸國の途に就きたるが其時會同四譯館より與へたる贈論に曰く此使節の一行は同日一回出立し互に相前後して事端を滋生する勿れ道官する者あれば禮部より朝鮮國に照會し嚴重の處分をなさしむべし云々とありしも由去る三月十五日の時報に載せたり

○西藏行幸二門の出入を禁ず　去る三月三十一日清帝は恭しく皇太后を奉し西陵に行幸せらるべきに付き其前日及當日並に還行の前日四月八日並に翌九日等都合四日は車駕の出入すべき西安門車成門等は殊更整肅嚴敬にすべきため閑人の出入するを禁止したれば其段各國公使に傳達の上其官員及人民をして一體に遵照せしむべしとの旨步軍統領衙門より各國公使に申越したり（西陵と云ふは雍正皇帝及其皇后慶皇帝及其皇后遺光皇帝及其皇后を葬りし陵なり）

○李鴻章の入京　李鴻章は直隸總督たるを以て西陵の行幸に供奉のため去る三月十一日天津を出立し十四日北京に著し十六日參内に二十三日は外國公使に面謁のため各館を歷訪し二十五日には神機營兵の操練を南苑に閲し二十六日には水雷火の演放を昆明湖に檢し二十九日北京を出立し常新店より供奉に列し西陵の祭典を擧りて去る七日東駕す常新店まで奏送し捷り再び入京せず直に天津に歸任するこゝふ聞く所に據れば李鴻章は此次の上京を時として鐵路を建築するの議案を提出せり其の線路は蘆溝より太沽に太沽より天津に通ずるものなりと云ふ（本年四月三十日官報）

雜報

○華族に法律研究　華族中の有志者が發起にて今度山吉盛光氏を招聘し毎木曜日を學習院に於て獨國法律の講義を依賴し同族は何人を論せず參聽を許す筈なりといふ

○綿種の配賦　駒場の東京農林學校にて蚕蛾に米國アブランドより取寄せたる綿種數升は目下同校に於て試驗中なるゆ各府縣よりの請求に依て養蚕其他の縣々へ夫々配賦するといふ

○蚕業試驗場　王子西ヶ原なる同試驗場よりは昨今三百人の實地傳習生（學理上及現業上等の傳習中なるが蚕兒い去る九日より二眠に掛りたるよし

○砂糖の輸入高　昨年來砂糖の不作なるゆ爲め產地は餘程好況なるも府下にては舶來品の澤山ある故差して相場に差響く模樣もなくさりとは讃岐產抔も近來は北海道に直輸を始めたるとあり本年二三月頃より頓み府下の輸入を減せしといふ又本年一月より三月中迄府下輸入れ箇數い左の如し

一月中輸入　（船和來）
二月中輸入　（船和來）
三月中輸入　（船和來）

一万六千五百八十四箇
三万三千四百三十一箇
八千九百一十箇
三万六千六百九十四箇
五千二百四十九箇
六万千五百六十六箇

○日本製の鑛油　明治十七年頃迄は海軍省に於ても鑛油の不豫あるりし爲め都て機關に施すには白搾水油を代用し一箇年同品の需用高は千七百石内外の由なりしが右の水油は多量に施さゞれば効用少なくさりとて之と多量に用ゆれば從て粘液の甚しきが爲め運輸の圓滑を失ふことあるを以て三四年前より舶來の鑛油を改めしが費用の點に至りては白搾水油より餘程の增加ありたれども舶來の鑛油は頗る好結果なるを以て昨今は固より同省に於ては鑛油は固より同省に於ては鑛油は固より同省に於ては鑛油